

蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年6月1日・第6号・〈写楽の謎〉号・発行・旧日光街道・越ヶ谷宿を考える会

写楽の^謎・解けた^謎・解けない^謎！



二代目坂東三津五郎の石井源成

東洲斎写楽！ ピカソ、マチス、モネもマネも
ゴッホも描けなかった～ あの肖像画を描いた
江戸時代の画家・写楽！ その写楽は実は、私
たちの越谷市にいろいろと関係があるヒト。大
きな謎につつまれたヒトでした。

「写楽」の大きな謎は解けた

写楽は江戸時代、寛政6年（1794）5月から翌・寛政7年1月までの約
10か月の間に140点あまりの役者の肖像画を描いて^{こっぜん}忽然と姿を消した浮
世絵師です。行き先もわからず、一番くわしいはずの版元（出版者）^{つたや}蔦屋
重三郎も寛政9年に^{かっけ}脚気のため亡くなってしまったので、「写楽とは誰な
のか」という大きな「謎のヒト、そのもの」になってしまったのです。

天保15年（1844）に刊行された^{げっしん}斎藤月岑追補の「増補・浮世絵類考」に
は、写楽のことを「^{てんめい}天明寛政年中の人 俗称^{きよ}斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁
堀に住す、阿波侯の能役者也～」と書かれています。しかし、これだけで

四大浮世絵師＝写楽・歌麿・広重・北斎 ①

は、十郎兵衛がどういうヒトだったのか、本当に「そういうヒトがいたのか、どうか」さえ、わからなくなってしまったのです。『どういうヒトだったのか、大きい謎だけに関心は深まります。



市川男女蔵の叔一平

たとえば、元九州大教授・^{なかのみつとし}中野三敏著の「写楽」（2007 刊）によりますと、昭和 64 年（1989）には 41 人を数える候補者があったようです。

そのなかには、^{まるやまおうきよ}円山応挙、^{たにぶんちよう}谷文晁、^{ほくさい}葛飾北斎、^{とよくに}歌川豊国、^{ほういつ}酒井抱一、^{うたまる}喜多川歌麿などの一流画家、^{じっぺんしゃいっく}十返舎一九、^{さんとうきようでん}山東京伝などの文人や薦屋重三郎までが入っていました。

画家では、超一流が名を並べましたが、これは、写楽の絵は究極の才能を持つヒトしか描けないと信じ、その超一流のヒトが通称を隠して描いたものに違いないと考えたのです。作家が候補にのぼったのも、画家にも描けない絵は、文章をひねるのが商売の文人が絵筆をひねった作品だから～ではないかと考えたのでしょう。

写楽の実態は、「似た絵を描いている」ぐらいのことではなく、重要なヒントがある江戸時代の先人の書き残した文書の^{しんし}真摯な追及しかないのです。そして、「写楽の実態」にたどり着けたのは「阿波」の人たちでした。

阿波の写楽ファンの方々は「斎藤月岑」の「増補・浮世絵類考」に「阿波侯の能役者」とあることに注目し、「阿波」の面目にかけて、この「写楽の謎」は徳島県（阿波）で解いてやるとの意気込みに燃えておられました。

「写楽の会」という NPO 法人をつくれ、写楽のことを徳島市民の方々

② 四大浮世絵師＝写楽・歌麿・広重・北斎

に伝える活動をすると同時に、写楽の追及に「研究班」を作り、取り組まれたのです。

平成6年（1996）のある日、その研究班で、徳島県立図書館に出かけられたとき、斎藤十郎兵衛（写楽）が阿波藩の能役者なら、身分は御家人ということになり、「寛政重修諸家譜」（寛政年間・幕府編修・大名旗本家譜集）に掲載されているのではないかということをおもいつかれた方があったのです。

その本を調べると、「斎藤十郎兵衛（写楽）の菩提寺が築地本願寺法光寺」であることが見つかりました。しかし、電話案内にかけると、そういうお寺は東京都中央区にはないと。思いついて、築地本願寺に電話されると、埼玉県越谷市に移られたと、電話番号と住所を教えてくれたのです。早速、そちらに電話されると、ご住職が出られ、「法光寺には昔からの過去帳がある」と言われ、調べてみるとのこと。

あらためて、ご住職が過去帳をお調べいただくと、過去帳には次のように書かれていました。「辰三月七日 釈大乘院寛雲居士 八丁堀地藏橋 阿洲殿御内 斎藤十郎兵衛事 行年五十八歳 千住二テ火葬」と。

まさに、「俗称斎藤十郎兵衛、居、江戸八丁堀に住す、阿波侯の能役者也」という斎藤月岑の「増補・浮世絵類考」のとおりではありませんか。

こうして、写楽についての大きな謎がきれいに解けたのです。

その謎解きに、大きな役割を果たしたのが私たちの越谷市の法光寺さんにあった過去帳だったのです。

法光寺さんには、残念ですが斎藤十郎兵衛の墓はありませんが、十郎兵衛

の記念碑が立ち、「写楽の会」と「蜂須賀桜と武家屋敷の会」によって阿波のシンボルの蜂須賀桜も植えていただいています。

越谷人にとっては、うれしいことです。自分たちが、この発見に対して、何かをして功績があったわけではありません。要するに、写楽である斎藤十郎兵衛の過去帳をお持ちの法光寺さんが、たまたま、越谷にあっただけのことです。でも、越谷人としては、この写楽の大きな謎が解けるときに、その近いところにいるだけでも、小さいご縁があったこととして、何となく嬉しいのです。喜ばせていただきたいのです。

そして、写楽と越谷のご縁は「過去帳の大きなご縁」に比べると、小さなことではありましようが、他にもご縁があります。それは、八丁堀地藏橋の写楽の住まいの隣に村田春海^{むらたはるみ}という国学者が住んでいて、そこに越谷恩間の国学者・渡辺荒陽^{こうよう}の娘の多勢子^{たせこ}が養女に入り、多勢子は隣の写楽の息子を可愛がって、その後、自分の養子として「村田春路^{はるみち}」という名前を付けて、いわば村田家の家業である国学者の跡を継がせているというご縁なのです。多勢子の実家である「恩間^{おんま}」と、法光寺さんが築地から引っ越してこられた三野宮^{さんのみや}とはすぐご近所にあるという不思議なご縁。

東洲斎写楽と越谷は二つもご縁があるのです。越谷人は、このご縁を、これからも大切にしていこうではありませんか。

「写楽」の、まだ解けない二つの謎

「大きな謎のヒト・写楽」の一番大きな「謎」であった「写楽とは誰なのか」については無事に解決が

④

四大浮世絵師＝写楽・歌麿・広重・北斎



三代目坂田半五郎の藤川水右衛門

つきましたが、解けない謎が二つ残っています。

①一つは、まったく、「浮世絵」とは縁のない写楽と、蔦屋とどのように関係ができたかという謎。

②もう一つは、写楽はどうして、10 か月で浮世絵を作るのをやめたかという謎です。

写楽と蔦重の関係はどのように始まったか



市川男女蔵の富田兵太郎と三代目大谷鬼次の川島治部五郎

写楽の、あの「肖像画」～それは誰かに無理やりに描かされたものではないと思われます。それを蔦重へ持ち込んだのは誰か。自分か、他人か。

「蔦重のところへ」というのがポイントだと思います。写楽に先生がいないとすると、自分の絵をどこに持ち込めばいいのか、わからないのではありませんか。逆に、蔦重の状況からすると、そのころ、売り出していた歌麿との距離が少し離れてきて、次に売り出すスターを探しているタイミングだった。そこに、蔦重でさえ見たこともない「肖像画」そのものか、情報か？ 持ってきたのは蔦重の現状を知っている「情報通」ではないでしょうか。

そこで、写楽と蔦重の関係が始まったと推察できます。情報に飢えていた蔦重に、この写楽の絵は、まさに天からの贈り物だったことでしょう。

写楽はなぜ、筆を折ったのか

あの世界の美術史を震撼させる肖像画を描いた東洲斎写楽がわずか10 か月で「筆を折った」のは何故なのでしょう。もっと、もっと描いてほしかったのに、写楽は描かなくなった、それどころか、姿が消えたのです。

その原因としては、次の二つが考えられます。

四大浮世絵師＝写楽・歌麿・広重・北斎 ⑤

①写楽（斎藤十郎兵衛）は阿波藩の能役者ですが、その身分は「士分」^{しぶん}なのです。士分となると、江戸時代でも「浮世絵」などに携^{たずさ}わるものではないというルールがあったようです。浮世絵師・鈴木春^{はるひが}信や歌麿も「役者」の絵を描かないというルールの許^{もと}にあったという話もあり、「役者絵」だけではなく、浮世絵も「越してはいけない分野」であるということだったらしいのです。万一の際には、それが上役やひいては藩主にまで累^{るい}が及ぶこともあり得るという時代だったので、写楽はそれを怖れて、「浮世絵」の世界から身をひくことにしたという説。

②写楽の作品は4期にわかれ一期・雲母摺^{きらすり}の大首^{おおくび}絵28点、二期・全身像38点、三期・相撲絵・役者絵などを含む64点、四期・役者絵・相撲絵など15点です。各期で出来栄えがちがい、もっとも素晴らしいのが第1期、次が第2期で、3期、4期はない方がよい位の出来なのです。写楽が、アマチュア時代から考えていた構想などで描いたと思われる28点が最高の傑作で、第2期は蔦重に時間を追い詰められたけれど何とか頑張ったもので、そのあとは写楽本人もアイディアは出てこないし、描く気もおこらない。蔦重の必死の説得にもかかわらず筆を折ってしまったのではないかという説です。

①か②か、どちらが正解だと思いますか。どちらでもいいのではないのでしょうか。あの1期の28点を世に残してくれたからね～写楽さん！

参考書 ○東洲斎写楽 日本アートセンター編 新潮社刊 H17 ○写楽 -浮世絵八華4 平凡社刊 1985 ○写楽 中野三敏著 (中公新書) 中央公論新社刊 2007 ○能役者・写楽 内田千鶴子著 三一書房刊 1999 ○「写楽」入門ガイド①② NPO 法人写楽の会刊 2019.2020